

令和7年度新規研究課題

課題番号 R07-02

課題名 : 小麦新品種の収量・品質の高位安定化に向けた栽培技術の確立

研究期間 : 令和6～9年

研究担当 : 農林業技術部農業技術研究室

1 研究の背景

小麦は県内の担い手農家における基幹品目であり、需要と供給の拡大が求められている。山口県では令和5年度にデンプン老化耐性を持つ日本めん用小麦「にしのやわら」を奨励品種に採用し、新規需要の確保を図ってきた。しかし、「にしのやわら」は穂発芽性¹⁾が「やや易」であるとともに子実タンパクが低下しやすい特徴がある。また、パン用小麦奨励品種「せときらら」では温暖化や土壤伝染性病害²⁾が収量と品質に影響を及ぼしつつある。高品質な小麦を生産するためには、これらの課題への早急な対応が必要である。

2 目的

日本めん用小麦「にしのやわら」の穂発芽対策および子実タンパク向上のための施肥技術を開発する。パン用小麦においては、高い秋播性³⁾と土壤伝染性病害に抵抗性を持つ新品種の収量および品質の高位安定化を可能とする栽培技術を開発する。

3 研究内容

- (1) 日本めん用小麦「にしのやわら」の栽培技術の開発
 - ・ 亜リン酸肥料による穂発芽の抑制効果の検証
 - ・ 子実タンパク向上に必要な開花期追肥量の解明
- (2) パン用小麦新品種の栽培技術の開発
 - ・ 秋播性が高い小麦新品種の播種適期の解明
 - ・ 子実タンパク向上に必要な開花期追肥量の解明
 - ・ 茎立ち期におけるリモートセンシングによる生育予測技術の開発

4 研究のポイント

- ・ 施肥量や播種適期など新品種の栽培暦の作成に必要な知見を明らかにすることで、研究成果の速やかな普及を図る。
- ・ 子実タンパクの安定化につながる生育予測技術を開発する。

脚注 1) 収穫前に種子が発芽すること。穂発芽した小麦が混入すると小麦粉の品質が低下する。

2) 山口県では土壤伝染性のコムギ縞萎縮病が問題となっている。

3) 出穂前に長期間の低温を必要とする性質のこと。秋播性が高いと暖冬年でも出穂期が早まりにくい。

小麦新品種の収量・品質の高位安定化に向けた栽培技術の確立

研究期間：令和6－9年度

研究担当：農林業技術部農業技術研究室

背景と目的

小麦は担い手農家の基幹品目



安定生産が求められている

「にしのをわら」

- 多収、加工性高い
- 低タンパク
- 穂発芽



対策技術の確立が必要

「せときらら」

- 多収、製パン性高い
- 土壌伝染性病害
- 暖冬による生育変動



研究内容

日本めん用小麦 ▶ 「にしのをわら」の品質向上

- 亜リン酸肥料による穂発芽の抑制効果の検証
- 子実タンパク向上に必要な開花期追肥量の解明



パン用小麦 ▶ 新品種の栽培技術の開発

- 秋播き性が高い小麦新品種の播種適期の解明
- 子実タンパク向上に必要な開花期追肥量の解明
- リモートセンシングによる生育予測技術の開発



研究のポイント

新品種の栽培暦を作成して速やかに成果を普及
子実タンパクの安定化につながる生育予測技術を開発